

文化的文脈を重視した日本語教育の実践：批判的視点の育成を目指して

Teaching Japanese in Cultural Context: Fostering Critical Perspectives on Language Use

相津 頼子, カールトン大学・オタワ大学

Yoriko Aizu, Carleton University, University of Ottawa

1. はじめに

これまで、日本語教育では、文法、語彙、発音、会話などの言語能力の習得が重要な学習目標として位置づけられてきた。しかし、言語は単なる文法規則や語彙の集合ではなく、特定の社会や文化の中で使用される社会的実践でもある。同じ言語形式であっても、話者、相手、場面、社会的関係などによって異なる意味や機能を持つ場合がある。そのため、日本語を学ぶ際には、「何をどのように言うか」という言語形式だけではなく、「なぜその表現が使われるのか」「その表現にはどのような社会的意味があるのか」という問いについて考えることも重要である。

このような問題意識を踏まえ、2026年冬学期にカールトン大学において「Japanese Language and Cultural Context」というコースを開講した。本コースでは、日本語を単なる言語体系としてではなく、文化的・社会的実践として捉えることを第一の目的とし、ジェンダー、方言、オノマトペ、アニメ、漫画などの身近な題材を通して、学生が言語と文化の関係を批判的に考察することを第二の目的とした。

本実践では、「日本語を知る」ことに加えて、「日本語を読む」という視点を導入した。すなわち、言語表現を単に正しい・正しくないという観点から捉えるのではなく、その表現がどのような社会的関係、価値観、アイデンティティ、あるいはステレオタイプを構築しているのかを考察することを目指した。

2. 理論的背景

本実践は、主に Critical Pedagogy（批判的教育学）、Linguaculture（リンガカルチャー）、Critical Literacy（批判的リテラシー）という三つの理論的枠組みに基づいて設計した。

2.1 Critical Pedagogy（批判的教育学）

Critical Pedagogy は、言語を社会的実践として捉え、言語使用の背後にある権力関係や社会的規範を問い直す視点を提供する（Kubota, 1996, 2003）。この観点からは、言語

学習を単なる知識や技能の習得としてではなく、言語と社会との関係を考える営みとして捉えることができる。

本実践では、例えば敬語やレジスターを単なる「正しい日本語」の形式として扱うのではなく、それらがどのように社会や人間関係と結びついているのかを考察した。

2.2 Linguaculture（リンガカルチャー）

Linguaculture は、言語と文化を切り離して捉えるのではなく、両者を不可分なものとして捉える概念である（Risager, 2006）。新しい言語文化体系に接する際、学習者は単に新しい語彙や文法を習得するだけでなく、意味、語用、文化的価値観、アイデンティティなどについても理解を再構築することになる。

本実践では、この視点に基づき、日本語と日本文化を別々に学ぶのではなく、具体的な日本語表現を文化的・社会的文脈の中で考察することを重視した。

2.3 Critical Literacy（批判的リテラシー）

Critical Literacy は、テキストや言語表現を一つの固定された意味として受け入れるのではなく、複数の視点から読み解き、その表現が何を意味し、何を構築しているのかを考える視点である（Kumagai, 2007; Kumagai & Iwasaki, 2011）。

例えば、アニメに登場するキャラクターの話し方を分析する場合、単に「このキャラクターはこの表現を使う」と確認するだけでなく、「なぜこのような話し方が使われているのか」「その話し方によってどのような人物像が構築されているのか」「現実の日本語使用とどの程度一致しているのか」といった問いを設定することができる。

本実践では、この三つの枠組みを相互に関連づけ、言語表現を「そのまま受け入れる」のではなく、その背後にある社会的意味、権力、アイデンティティ、規範などを考察する授業設計を行った。

3. 授業実践の概要

3.1 コース概要

「Japanese Language and Cultural Context」は、2026 年冬学期（1 月～4 月）にカールトン大学で実施された。履修者は 50 名で、コースコードでは 2 年生を対象としたコース

であったが、実際には1年生から4年生までの学生が履修した。また、日本語能力は受講の前提条件ではなかったため、学生の日本語のレベルはさまざまであった。

評価では、中間試験・期末試験に加え、授業中のグループ活動やディスカッションへの参加、個人のリフレクション（振り返り）、プロジェクトを取り入れた。特にリフレクションを通して、授業活動における学生自身の気づきや考えの変化を記録することを重視した。

3.2 コース構成

12週間の授業では、以下のテーマを扱った。

- Introduction: Language as a Cultural Mirror（はじめに：文化を映す鏡としての言語）
- Historical Roots of Japanese Language（日本語の歴史的背景）
- Gaman and Rei: Learning Culture through Budo Practice（我慢と礼：武道の実践を通して学ぶ文化）
- Gender in Japanese Language（日本語におけるジェンダー）
- Dialects and Regional Identity（方言と地域アイデンティティ）
- Japanese Poetry: Haiku and Tanka（日本の詩歌：俳句と短歌）
- Art, Aesthetics, and Expression: From Chōjū Giga to Manga（芸術・美意識・表現：鳥獣戯画から漫画へ）
- Anime and Character Speech（アニメと役割語）
- Sound Symbolism and Onomatopoeia（音象徴とオノマトペ）
- Digital Japan: Language Online（デジタル社会の日本：オンラインのことば）

これらのテーマは一見すると異なる領域に見えるが、授業全体を通して、「言語は文化や社会をどのように反映しているのか」という共通の問いを設定した。

3.3 授業の流れ

授業は基本的に、①講義、②グループ活動、③リフレクションという三段階で構成した。まず講義では、各テーマに関連する理論、歴史的背景、社会的背景などについて説

明した。その後、学生は実際のメディアや言語資料を分析し、グループで意見交換を行った。最後に、活動を通して気づいたことや新たに生じた疑問について各自でリフレクションを書いた。

授業全体で「知識を得る → 実際の言語を分析する → 自分の考えを振り返る」という学習過程を設定した。この過程を通して、受け身の言語学習から、主体的に言語を読み解く学習への転換を目指した。

4. 授業活動の実践例

4.1 Gender in Japanese Language（日本語におけるジェンダー）

このトピックでは、女性の主人公が男装して男子校に通う物語『花ざかりの君たちへ』のアニメのクリップを用い、登場人物の一人称、文末表現、話し方、トーンなどを分析した。特に、独り言と他者との会話における言語使用の違いに注目し、場面や相手によって言語表現がどのように変化するのかを考察した。

さらに、メディアにおけるジェンダー表現と実際の日本語使用との違いについても検討した。ディスカッションでは、「ポピュラーカルチャーは非日本語話者の日本語観にどのような影響を与えるのか」「ジェンダー化された言語は今後に残るのか」「自分の母語にもジェンダー化された言語は存在するか」といった問いを設定した。

このような活動の後に書かれた学生のリフレクションには、“Gendered language is evolving as a tool for identity expression.”というコメントが見られた。この学生は、ジェンダー化された言語を固定的な言語形式としてではなく、アイデンティティを表現するための手段として捉えていた。

4.2 Dialects and Regional Identity（方言と地域アイデンティティ）

方言のテーマでは、方言がメディアにおいてどのように表象されているのかを調査した。学生は、方言の地域性だけでなく、特定の方言に付与されている社会的イメージにも注目し、キャラクターの性格や役割と方言との関係を分析した。

ディスカッションでは、「方言が誇りになる場面と恥になる場面はなぜ生まれるのか」「方言が親しみなどのイメージと結びつくのはなぜか」「標準語に置き換えた場合、キャラクターの理解はどのように変化するか」といった問いを扱った。

学生からは“Japanese is far more fluid than the rigid Standard Japanese taught in textbooks.”というリフレクションがあった。このコメントからは、教科書で提示される標準語だけが日本語なのではなく、日本語には地域的・社会的な多様性があることへの気づきが見られる。また、“Dialect suppression reminds me of residential schools in Canada.”というコメントも見られた。ここでは、日本における方言抑圧の問題が、学生自身が知るカナダの言語抑圧の問題と関連づけられている。このようなリフレクションは、単に日本文化についての知識を得るだけではなく、自らの社会的・文化的経験と比較しながら考察する姿勢が育まれたことを示している。

4.3 Anime and Character Speech（アニメと役割語）

このトピックでは、学生自身が選択したアニメの短いクリップを用いて、代名詞、文末表現、ピッチ、リズム、語彙、丁寧さ、感情的トーンなどの言語的特徴を分析した。そして、これらの特徴がキャラクターの人物像をどのように構築しているのかを考察した。また、アニメにおける役割語が現実の日本語使用とどの程度一致しているのか、さらに英語字幕が日本語のニュアンスをどこまで反映しているのかについても議論した。

学生のリフレクションには、“Character speech can mislead learners about real Japanese.”というコメントがあった。また、“Dialect and role language add depth but also risk reinforcing stereotypes.”というリフレクションも見られた。

これらのコメントから、学生はアニメの言語がキャラクターに深みを与える一方で、現実の日本語について固定的なイメージやステレオタイプを形成する可能性にも気づいていたことが分かる。

5. リフレクションに見る学生の学び

学生のリフレクションを全体的に検討すると、Language、Identity、Stereotype、Representation、Power、Hierarchyなどの語や概念が繰り返し現れた。これらの記述からは、学生の学びが単なる「日本文化についての知識の習得」ととどまらず、文化的文脈の中で言語を読み解く方向へ広がっていたことが示唆される。また、以下の四つの視点が確認された。

5.1 言語と権力

第一は、言語と権力との関係である。例えば敬語やレジスターについて、学生はそれらを単なる正しい言語形式としてではなく、社会的関係を構築する手段として捉えていた。

ある学生は、“Politeness can express both consideration and control.”と述べている。このコメントからは、丁寧な言葉遣いが相手への配慮を表す一方で、社会的階層関係を維持したり、場合によっては相手をコントロールしたりする働きを持つことへの気づきが見られる。

つまり、学生の考察は、「Language（言語）→ Politeness（ポライトネス）→ Hierarchy（上下関係）→ Power（権力）」というように、個別の言語形式から社会構造へと広がっていた。

5.2 言語とアイデンティティ

第二は、言語とアイデンティティとの関係である。特にメディアで使用されていた方言について、“The dialect adds depth to the character.”や、“He chooses to use Kansai-ben.”といったコメントが見られた。ここで重要なのは、方言を単なる地域的な言語差として捉えるのではなく、話者やキャラクターが自分自身をどのように表現するのかという問題として捉えている点である。

このことから、学生の考察は、「Language Use（言語使用）→ Social Meaning（社会的意味）→ Identity（アイデンティティ）」と発展したと考えられる。言語は情報を伝達するためだけではなく、話者やキャラクターが「誰なのか」を表現し、ときにはそのアイデンティティを構築する手段でもあると理解した。

5.3 表象とステレオタイプ

第三は、メディアにおける表象とステレオタイプである。アニメや漫画などのポピュラーカルチャーでは、役割語などを利用することで、キャラクターの性格や属性が効率的に伝達される。しかし、それらの表現が現実の日本語をそのまま反映しているとは限らない。そのため授業では、「現実とのズレはないか」「これは誰のイメージなのか」「何を強化しているのか」という問いを設定した。

学生からは、“Popular culture makes people perceive the language as more rigid than it is.”や“Character speech can be a misleading representation of Japanese speech.”というコメントが

あった。これらは、メディアが単に現実を反映するだけではなく、言語についての社会的イメージそのものを構築する可能性について学生が考え始めたことを示している。

5.4 言語と文化的価値観

第四は、言語と文化的・社会的価値観との関係である。学生のリフレクションに“Language ability was not enough.”や“Fluency did not automatically provide cultural intuition.”といったコメントが見られた。これらは、言語能力が高いことだけでは、必ずしも十分なコミュニケーション能力につながらないという学生の気づきを示している。言語が使用される社会的・文化的文脈を理解し、その場で何が適切なのかを判断することも重要である。

したがって、本実践では、「言語能力 + 文化理解 + 社会理解」という視点の重要性が示唆された。

6. 考察

以上の結果を、本実践の理論的枠組みと照らし合わせると、三つの点が指摘できる。

第一に、Linguaculture の観点からは、日本語と日本文化を別々に学ぶのではなく、両者を統合的に理解する学習が行われた。学生は、ジェンダー、方言、アニメ、敬語などの具体的な日本語表現を分析しながら、その背後にある文化的・社会的意味について考察していた。この点は、言語と文化を不可分なものとして捉える Linguaculture の考え方と対応する。

第二に、Critical Literacy の観点からは、アニメ、方言、ジェンダーなどの表象を単なるエンターテインメントや文化的知識として消費するのではなく、複数の視点から読み解く姿勢が確認された。特に、アニメにおける役割語や方言について、学生は「現実の日本語との違い」「ステレオタイプ」「社会的イメージ」などに注目していた。このことから、メディア上の言語表現を批判的に読むための契機が生じていたと考えられる。

第三に、Critical Pedagogy の観点からは、言語使用と権力、アイデンティティ、社会規範との関係への気づきが見られた。例えば敬語について、学生はそれを単なる言語形式としてではなく、社会的階層や権力関係と結びついたものとして考察していた。また、方言の抑圧を自身の社会的・文化的経験と関連づけるリフレクションが見られた。

このように、本実践では、学生の考察が個々の言語形式から、その言語形式が持つ社会的意味へと広がっていた。「言語形式 → 社会的意味 → 権力・アイデンティティ・

規範」という思考の広がりが見られたことは、本実践における重要な成果の一つである。

ただし、今回のリフレクションの分析だけから、学生に「批判的思考能力」が完全に身についたと結論づけることはできない。リフレクションは学生の気づきや自己認識を示す重要な資料である一方、それだけでは批判的思考の形成を客観的に測定することは困難である。そのため、本実践の結果は、学生の批判的視点の「形成」を証明するものではなく、そのような視点が生じる可能性を示すものとして捉える必要がある。

7. 今後の課題

今後の課題として、第一に、学生の学習成果をより継続的かつ体系的に検証する必要がある。今回の実践ではリフレクションを中心に学生の学びを分析したが、授業開始時と終了時の意識の変化や、学生の分析能力の変化をより明確に捉える方法が必要である。第二に、「批判的視点」を具体的にどのように定義し、どのように評価するのかについて検討する必要がある。例えば、言語表現を複数の視点から分析する能力、言語と社会構造との関係を認識する能力、自身の文化的前提を相対化する能力など、批判的視点を構成する要素をより明確にすることが求められる。

8. おわりに

本稿では、「Japanese Language and Cultural Context」の授業実践について報告した。学生のリフレクションを分析した結果、「言語と権力」「言語とアイデンティティ」「表象とステレオタイプ」「言語と文化的価値観」という四つの視点が繰り返し確認された。これらは、学生が日本語を単なる学習対象として捉えるのではなく、言語を通して文化や社会を考察し始めたことを示唆している。

以上から、文化的文脈を重視した日本語教育は、学習者が言語形式をそのまま受け入れるのではなく、その背後にある社会的意味や価値観について考えるための一つの有効なアプローチとなる可能性がある。

今後はAIを含むさまざまな情報技術によって、文法、語彙、文化に関する基本的な知識を学習者自身がさらに容易に得られるようになる。そのような環境においては、知識を提供することだけではなく、得られた知識をもとに問いを立て、複数の視点から考え、社会や文化を読み解く能力を育成することが、より重要になると考えられる。今後の日本語教育では、「日本語を知る」ことに加えて、「日本語を読む」こと、すなわち、

言語を文化や社会との関係の中で捉え、自ら問いを立て、考察する力を育てることが重要になるのではないだろうか。

参考文献

Kubota, R. (1996). Critical pedagogy and critical literacy in teaching Japanese. *Japanese-Language Education around the Globe*, 6, 35–48.

Kubota, R. (2003). Critical teaching of Japanese culture. *Japanese Language and Literature*, 37, 67–87.

Kumagai, Y. (2007). Tension in a Japanese language classroom: An opportunity for critical literacy? *Critical Inquiry in Language Studies*, 4(2–3), 85–116.

Kumagai, Y., & Iwasaki, N. (2011). What it means to read “critically” in a Japanese language classroom: Students’ perspectives. *Critical Inquiry in Language Studies*, 8(2), 125–152.

Risager, K. (2006). *Language and culture: Global flows and local complexity*. Multilingual Matters.